

# 月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた 教育史研究を求めて

第109号 2024年1月15日

編集・発行 『月刊ニューズレター 現代の大学問題を  
視野に入れた教育史研究を求めて』編集委員会  
(編集世話人 富岡勝・谷本宗生)

連絡先 大阪府東大阪市小若江3-4-1  
近畿大学教職教育部 富岡研究室  
e-mail: tomiokamasa@kindai.ac.jp

HP (最新号とバックナンバーを公開中)

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>

コラム -着任して想うこと-	長谷川鷹士	2
逸話と世評で綴る女子教育史(109) -銀幕の美女とポスター・挿絵に画かれた美女たち-	神辺 靖光	5
大東文化大学の教育史担当(1962年着)・樫村勝教授の著作について -『茨城県教育史』下(1980年)から-	谷本 宗生	14
大正時代の女子高等教育(64) 二階堂体操塾—体育の授業の様子	長本 裕子	16
新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究に関する覚書 (33):『鳥取県公報』にみる鳥取県立高等学校の専攻科(7)	吉野 剛弘	21
旧制灘中学の教育目標と生徒の活動(5)	富岡 勝	24
体験的文献紹介(58) -中学校教則大綱とその意義-	神辺 靖光	27
近況報告	長本 裕子	34
刊行要項(2015年6月15日現在)		36
短評・文献紹介		37
会員消息		38

## コラム

着任して想うこと

はせがわようじ  
長谷川鷹士

(上越教育大学)

はじめに

2023年10月から上越教育大学に助教(任期付)として勤務している。上越教育大学は言うまでもなく、いわゆる新構想教育大学である。兵庫教育大学、上越教育大学、鳴門教育大学が現職教員を対象とし

た大学院を中心とする大学として設置された。

したがって教育大学ではあるが、戦後教育改革で師範学校が「昇格」した他の教育大学・教育学部とはやや歴史的経緯が異なる。上越地方に戦前存在していた師範学校は新潟県高田師範学校である。地元の強い意向を受けて、1899年に設置された(1)。その後、戦前にも数度の県内の師範学校統合論にさらされながらも、戦後までその命脈を保つ(2)。戦後は新潟大学高田分校、新潟大学教育学部高田分校として4年制の芸能学科などが設置され、独自の教員養成を実施した。1976年に新潟大学教育学部への統合が決定され、1980年に閉校式を挙行し、その歴史を閉じることとなる。しかし、上越地方に大学をという地元や同窓会の強い意向もあり、1978年に上越教育大学が設置され、附属小学校などの諸施設が上越教育大学に引き継がれることになる(3)。

こうした経緯もあってであろうか、上越教育大学の年史では高田師範学校が前身学校として厚く記述されるということがない(4)。大学HPの沿革でも、高田師範学校には触れていない(5)。たとえば東京学芸大学が大学HPの沿革表に1873年の東京府小学教則講習所を記載し(6)、『東京学芸大学150年の歩み』において、前身の師範学校を「師範学校時代も、本学の歴史に含みこむ」としていることとは大きな違いがあると言える(7)。

もちろん、高田分校は新潟大学教育学部に統合され、上越教育大学は新たに設置されたという経緯がある以上、大学HPなどで前身学校と位置づけないのは自然ではある。しかし、その地域において、教員養成に取り組んできたという機

能においては、なにがしかの「連続性」を見ることも可能であろう。こういった意味では地域の「先行学校」として高田師範学校を位置づけて、その連続／非連続を意識した上越教育大学の沿革史が書かれてもよいのではないだろうか。

高田師範学校同窓会の公孫会設置から去年でちょうど120年であったので、ここが一つの機会ではあったであろう(8)。次なる機会は4年後の2028年がちょうど上越教育大学設置50年である。

……ここまで書いて。上越教育大学には日本教育史を専攻している研究者は私しか在籍していない(近接分野の優れた研究者は多数在籍している)。仮に沿革史を作りましょうという話になって、「先行学校」の高田師範学校も位置づけようといった場合、お鉢は私に回ってくる。さすがに今はまだ力不足である(今、実力不足でできないと言っているのは、一生できないというよくある話はここでは無視する)。

高田師範学校の沿革を記した書籍としては同校同窓会である公孫会が作成した『公孫樹下の八十年』など優れたものが存在する。そうした書籍を踏まえながら、高田師範学校から上越教育大学までをつらぬく沿革史が編まれる必要があるのではないか。

高田師範学校の校地決定の決め手となった二本の公孫樹を眺めながら(9)、そんなことを思う。

## 注

(1) ただし設置当初の名称は新潟県第二師範学校、高田師範学校への改称は1901年(記念誌編集部『公孫樹下の八十年』1982、pp.11-26)。

(2) 1930年、1935年の2度、統合論が議論されている(『同上』、pp.131-148、pp.199-222)

(3) 「七資料—大学問題の経緯の概要」『同上』、pp.470-482。

(4) 確認できた範囲では上越教育大学十周年記念誌編集小委員会作成委員会編『上越教育大学十周年記念誌』1988、20周年記念誌作成委員会編『上

越教育大学創立 20 周年記念誌』1998、上越教育大学編『上越教育大学三十周年記念誌』2008、上越教育大学創立 40 周年記念行事準備委員会記念誌部会編『国立大学法人上越教育大学創立四十周年記念誌』などがあるが、いずれもタイトルの通り記念誌である。高田師範学校に紙幅は割かれていない。なお上越教育大学開学記念行事準備委員会記念誌編集小委員会編『上越教育大学の設置と五年のあゆみ』1983 は確認できていない。

(5) 上越教育大学 HP「大学紹介 沿革」(閲覧日:2024 年 1 月 30 日)

<https://www.juen.ac.jp/050about/010info/020history.html>

(6) 東京学芸大学 HP「大学紹介 沿革表」(閲覧日:2024 年 1 月 30 日)

<https://www.u-gakugei.ac.jp/01gaiyo/enkaku.html>

(7) 国立大学法人東京学芸大学編『東京学芸大学 150 年の歩み』学文社、2023、ii。

(8) 高田師範学校同窓会の公孫会は 1903 年に設置された(記念誌編集部『前掲』、p.57)。

(9) 『同上』、pp.18-19。

## 逸話と世評で綴る女子教育史(109)

### —銀幕の美女とポスター・挿絵に画かれた美女たち—

かんべ やすみつ

神辺 靖光(ニューズレター同人)

前回、昭和時代の開幕とともに娯楽映画がはじまったことを述べた。最初は剣撃映画、次いでエノケン・ロッパの喜劇映画、そして、恋愛映画という順序で日本中に拡まったのである。映画は芝居や寄席と違って舞台や演芸場がいらぬし、役者や芸人が全国の各地に出向く必要がない。田舎町の公会堂や小学校の講堂でも映写機とフィルムさえ持参すれば上映できる。日活、東宝、松竹というような大きな映画会社は自前の映画館を日本国中の小都市につくってしまった。こうして昭和10年代には日本中の子どもたちが映画俳優を真似たチャンバラごっこをするようになったのである。

映画は舞台転換の面倒くささがない。ロケーション(野外撮影)によって遠望がきく場面からクローズアップ(大寫し)によって俳優の姿や表情を間近に見せることもできる。歌舞伎や新派でも化粧、着付け、演技、照明等の技術を駆使して役者を美男美女に見せることができる。よって芝居の世界には女形という特殊な役者が出現したのである。けれども映画の世界でクローズアップされては男が女に化けきることはできない。よって映画女優が主役を張るにはどうしても美人でなければならないのである。娯楽映画がはじまるとすぐに川崎弘子、高峰三枝子、田中絹代等の美人女優が次々に現れたのはこれがためである。昭和の時代には数多の美人女優が現れたが代表的な女優をあげるならば昭和12年、16歳で美人女優として突如現れた原節子であろう。昭和の殆どの時期に銀幕を飾って人々を楽しませた。(図A)



図 A

大正末期から昭和のはじめにかけて東京では丸の内、銀座、浅草、大阪では心齋橋などの盛り場にダンスホールやカフェが続々できた。そしてダンスホールやカフェが新しく登場した男女サラリーマンの社交場になった。カフェは本来、コーヒーを主とする喫茶店であるが、日本ではワインやウイスキー、ビールなどの洋酒も出すし、それに合う軽食店も兼ねる。いわば洋式居酒屋なのである。そしてこれとは別に日本酒を主とする従来の居酒屋、飲み屋がある。きちんと区別されたわけではないが、旧来の商店や職人の番頭、親方たちは日本酒専門の居酒屋に通つたろうし、新興サラリーマンの多くはカフェで洋酒を楽しんだのではないだろうか。その際、同僚かどうかわからないが洋装の新しい女性を同伴するのである。これらの女性を当時、モダンガール、略してモガと呼んだのである。モガは決してすいしよう推称の言葉ではない。非難を込めている。図Bに見られるように大人たちは非難



図 B

の目つきでモガを眺めている。断髪にしてぼうし妙な帽子をかぶり、胸元や腕を大きく見せるのは女子として恥すべき姿であった。そのような非難がちまた巷の声と想つたのであろう。警視庁は昭和3年11月、ダンスホールの取締令を発した。18歳未満の男女の入場禁止、ホール内での禁酒、午後11時閉店等を骨子とするものだが、効果は全くなかったようである。

右図のように、胸元を大きくあけ、白い腕を恥ずかしげもなく見せる写真や絵が大ぴらに登場するのは大正10年、赤玉ポートワインのヌード広告(図Cの左上)からである(江戸時代から枕絵と称する春画があったが市場には出廻らない)。モデルの松島栄美子は27歳の浅草オペラの女優だった。広告主には寿屋(現サントリー)で新作の赤玉ポートワインを売り出すために斬新な企画をたて松島にそのモデルを嘆



図 C

願したのである。両者苦心研究の末、この広告は驚嘆裏に受け入れられ、その後の広告に引き継がれた。本誌掲載の伊藤深水画・ベルベツト石鯨のセミヌード広告(図C右上)は、“この石鯨を使えばこんな美肌になれますよ”というメッセージのようにも受け取れる。その他、美女の広告はとかくビール(図C左下と右下)や日本酒が多い。飲酒と女性は必ずしも因果関係はないが酒造家や宣伝マンの思い込みであろう。

さて、話を雑誌の挿絵<sup>さしえ</sup>に進めよう。それには大正中期からはじまった大衆相手の雑誌の盛行から述べねばならない。大正6年3月、雑誌『主婦の友』が発刊された。日本の女性は6年間の小学校を終えると活字に縁のない生活になる。そのような家庭の主婦に日常生活に役立つ知識をもたらそうとしたのが、この雑誌の趣旨であった。従ってここで言う主婦は庶民的なヌカミソクサイ主婦を対象としている。創刊号で新渡戸稲造による「夫の意気<sup>いくじ</sup>地無しを嘆く妻へ」という適切な助

言を掲載している。続いて講談社から『婦人倶楽部』、さらに『婦人公論』（婦人公論社刊）の発刊となった。これは明治の『青鞥』路線を継いだもので女性の自覚、地位向上をめざす高級なものである。（図D参照）



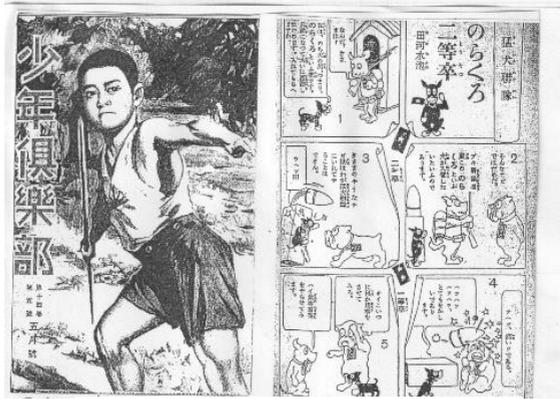
図D  
『主婦の友』 『婦人倶楽部』 『婦人公論』



『キング』創刊号と付録『明治大帝』

昭和2年11月、講談社が総合雑誌『キング』を創刊した。828頁の大冊で付録に上等な『明治大帝』がつく。これは新たに定められた明治節（11月3日）

に合わせたものである。定価 1 円、この創刊号 50 万部が忽ち完売したので増刷を重ねて 74 万部に達した。当時、一番売れていたのが『主婦之友』で 20 万部であったから 75 万部が如何に驚異的なものであったかわかるだろう。宣伝方法も含めて全企画は講談社社長の野間清治であった。野間はこれまで『講談倶楽部』（明治 44 年創刊）『少年倶楽部』（大正 3 年）『面白倶楽部』（大正 5 年）、『婦人倶楽部』（大正 9 年）『少女倶楽部』（大正 12 年）、『幼年倶楽部』（大正 15 年）等を次々に発刊、さらに幼児のため『キンダーブック』を次々に出すに及んで講談社は大衆の大部分を占める勤め人、商人、主婦、女学生、小学生等の大半を読者に抱え込んでしまった。



『少年倶楽部』 昭和 2 年 5 月号

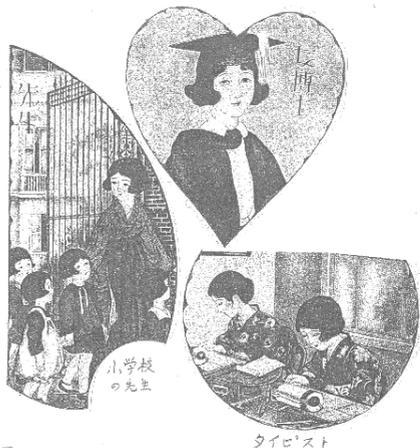


『幼年倶楽部』 創刊号 大正 15 年 1 月  
目次と表紙



『キンダーブック』

講談社だけでなく大正後期から昭和初期にかけて<sup>かわい</sup>可愛い少年少女の絵が雑誌や<sup>すごろく</sup>双六絵に登場するようになった。【絵1】は『少女世界新年号』（昭和2年）の附録で「少女運だめし<sup>すごろく</sup>双六」に画かれた三つの場面である。昭和初期の少女があこがれる職業のうち点数が高い女博士（大学教授のことか）、小学校訓導、タイピストをあげた。



絵 1

このような傾向は“世俗的な<sup>げび</sup>下卑たる子供の読み物を排除して子供の純性を開発するために”としてつくられた鈴木三重吉の『赤い鳥』（大正7年7月刊）や『金の船』の表紙絵にすでに表れている。

さて、講談社をはじめとして大正中期から始まった女性向き<sup>む</sup>少年少女向き雑誌に新しい趣向が加わった。挿絵の多様である。幼年幼児

用の雑誌ははじめから絵本としてつくられているから多言<sup>よう</sup>を用しない。昭和になって急成長した少年少女雑誌にこの傾向が強い。（絵2）を見られたい。山口将一郎<sup>えが</sup>画く「桜ふぶき」である。『少年倶楽部』昭和4年3月号の付録として額面用に画かれたものである。山口は『少年倶楽部』や『少女倶楽部』に多くの武者絵を画いて人気を博した。同じく若武者絵で人気があったのが伊東彦造である（絵3）。これも『少年倶楽部』付録として額面用に広くゆき渡った。（絵4）の「さ



『金の船』



『赤い鳥』

らば故郷」は高島華宵が『日本少年』昭和4年3月号に載せたものだが、彼は『少年倶楽部』を舞台に抒情的な少年少女を画き“華宵時代”を築いた。『少年倶楽部』で少年読者の血を湧き立たせたのは山中峯太郎の「敵中横断三百里」の右に出るものはないだろう。その挿絵を担当したのが樺島勝一であった(絵5)。右のほか「垂細垂の曙」「吼える密林」などの代表的挿絵がある。少女絵を専門に画いたのは須藤しげるである。大正5年の『少女画報』に吉屋信子の『花物語』の挿絵を画いたのを皮切りにその後『少女倶楽部』を舞台に美少女を画き続けた。「月姫」(絵6)は代表作と言ってもよい。前にあげた高畑華宵画く「清きたより」は“華宵便箋”として売り出され、一時期、このような抒情便箋が流行した。そして『少女倶楽部』昭和6年7月号の口絵を飾った<sup>ふきやこうじ</sup> 落谷紅児の「散歩」(絵7)



絵2



絵3



絵4



絵5



絵6



絵7

である。落谷紅路は『少女画報』『婦人画報』『婦人倶楽部』『少女倶楽部』『令女界』等に少女画、美女画を画きまくってその第一人者になったのである。

## 参考文献

講談社『昭和二万日の全記録1』『同2』

講談社『日録20世紀1918』『同1925』

## 追記

この記事に関連して、神辺先生から以下のようなご要望をいただきましたので、長本さんからの神辺先生宛書簡を紹介します。（富岡）

---

### <神辺先生からのご要望>

女子教育史で挿絵のことを書いた時、挿絵画家は男性ばかりで女性の挿絵画家はいないという話を盟友の長本裕子さんに話したら、長本さんからそんなことはないと同封の手紙をいただきました。わがニューズレターの同人はこのように助け合っているので、同封の手紙を「女子教育史109」の掲載紙に載せて貰いたく、お願いいたします。

---

### <長本さんからの神辺先生宛書簡>

前略ごめんくださいませ。

先日は、四ヶ月ぶりにお目にかかれ、うれしゅうございました。

さて、その節にご質問のあった、女子美の卒業生の活躍について、資料をお送りいたします。昭和三十六年に高島屋で女子美と朝日新聞社が主催して行われた「近代百年を彩る女流画展」に女子美の卒業生日本画家十名、洋画十二名の作品が展示されました。その資料の中から、大正・昭

和の戦前に活躍した主な人物を抜粋してメモを作りました。雑誌などの挿絵や吉屋信子の『花物語』の挿絵を描いた亀高文子、童話の挿絵や詩人の本の装幀などを手がけた深沢紅子、絵本や児童書の面を担当した丸木俊俊(赤松俊子)さんなどがいます。戦後、雑誌連載の林芙美子の小説『茶色の目』の挿絵を担当した松井悦さんもいます。

メモにピックアップした人たちのほかにも、画家として、また、美術の教員として生涯活躍した人も大勢いることがわかりました。私も「大正時代の女子教育史」の女子美の項に加えたいと思います。

もう一点、「キューピー」の件について、インターネットで調べた資料を同封いたします。野口雨情の「青い目の御人形」の歌詞についても多くの日本人が誤解していることがわかりました。私もその一人でした。いろいろ調べてみるとおもしろいですね。

先生は、この「大正時代の女子教育史」のほかにも、まだまだお書きになりたいものがたくさんあるとお話に、パワーをいただきました。来年の六月ごろまでに原稿を出せるように、ピッチを上げます。

寒暖差が激しい折、お体にお気をつけてお過ごしくださいませ。

早々

十一月二日

長本 裕子

神辺靖光先生

追伸 男性の挿画家についての資料も添えます。ご参考まで。

---

## 大東文化大学の教育史担当(1962年着)・榎村勝教授の著作について

### —『茨城県教育史』下(1980年)から—

たにもと おねお  
谷本 宗生(大東文化大学)

大東文化大学で教育学・教育史を担当した(1962年度着任)教授の榎村勝(生1898~没1990年)は、広島高等師範学校徳育専攻科卒業(1930年)で、茨城大学名誉教授(1962年定年)を務めた人物であった。榎村が精力的に記した、晩年の著作物のなかから、『茨城県教育史』下(1980年)を、本稿では少し紹介してみたいと思う。

\*\*\* \*\*

まず同書の「まえがき」で、榎村は「教育の進展は、つねに教育の社会的条件と、社会の教育的条件とがからみあって進展するものである。つまり、教育は地域の歴史的伝統や、文化発達の様相など、過去に条件づけられるものであるが、また、他方には、これらの伝統をやぶり、地域社会の陋習を打破して、将来にうかがって社会更新の条件をつくってゆくものでなければならない」と、率直に述べている。

同書のなかでも、とくに戦後の新制国立大学・茨城大学の形成において、地元地域の旧制専門学校なども統合されていくわけであるが、榎村自身師範学校関係者として、戦後の新制大学の誕生について、その問題点などを含め、裏表なく赤裸々に記されている点がとても特徴的であろう。

「施設とも関連のある大問題は、当時すでに土浦に落ちついて居た教育学部の水戸移転問題であった。人物育成のための一般教養学科、即ち人文、社会、自然の三科学にわたる学科の教育効果を十分に発揮するには、幾多の学部を一カ所に集めた総合大学方式が理想的である。少なくとも、文理学部と教育学部は同一の場所にあるのが効果的である。然るに、当時の教育学部当事者中には、水戸移転に不満を抱く者もあり、旧師範学校同窓会の一部に

も反対者があり、さらに土浦市を始め、県南の市町村の中にも反対を表明する向きもあって、一時は政治問題化のおそれさえあった。私の赴任最初の教授会において、この問題を討議した際の賛否両論者の論争の物凄い情景は、水戸の志士たちの昔を忍ばしめるものがあった」（487～488頁）

さらに関係者の一人でもあった榎村は、戦後の新制大学誕生への期待値も込めて、次のように述べている。まさに、これは貴重な当事者の本音なのであろう。

「何ごとも、創業時代における当事者の苦心は当然であるが、幸いにして、本県当局各位を始め、先覚有識者諸氏の茨城大学の国家的、地方的使命の重要性についての深い認識は、さらに多数県民の教育文化に対する伝統的熱情と相まって、この大学育成に絶大の関心が寄せられ、県庁内に、とくに大学設立期成会が組織され、常設事務局、専任事務員が置かれ、つねに物、心両方面から多大の支援を惜みず、各教室の改装を始め、大学本部の新築、学生図書館の建設、理化学実験室の整備、教職員住宅の建築、さらに民間からは常陽銀行の経済研究室の寄贈、また、大学の近くに、県立体育館を建設して、大学の利用に供する等、当時国立大学の創立に協力して、巨額の経済的後援をした府県の中で、本県は岡山県に次いで第二位であったという。この地方民間の熱意は、政府当局を動かして、その後の国営施設に着手せしめたのであった」（488～489頁）

なお大東文化大学に在職していた榎村は、論文「道徳教育上における西村茂樹の業績」を、『大東文化大学紀要 文学編』第7号（1969年2月）の巻頭で投稿掲載している。また茨城大学を定年した際には、論文「教育史上における水戸藩彰考館の意義」を、『茨城大学教育学部紀要』第11号（1962年3月）の巻頭に掲載している。

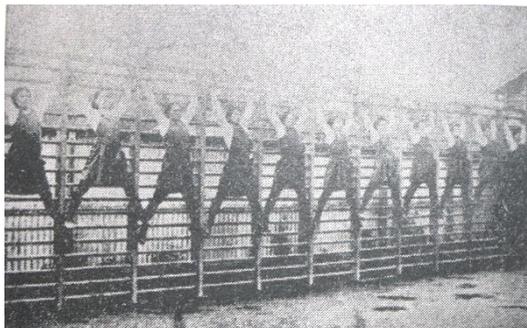
## 大正時代の女子高等教育(64)

### 二階堂体操塾—体育の授業の様子

ながもと ゆうこ

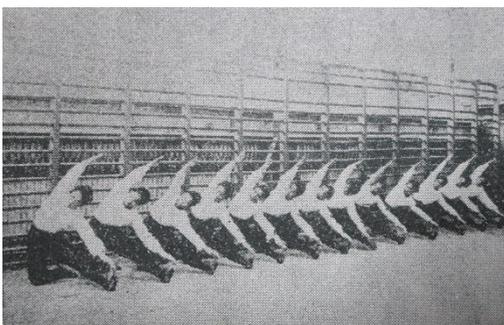
長本 裕子(ニューズレター同人)

開塾後しばらくは体操・競技・遊戯すべてトクヨが一人で担当していた。入塾後ただちに号令練習を始めさせ、実地教授法を研究させた。トクヨの号令は美しく、運動会にはそれを聞くためにあちこちから見物客が集まったほどだ。トクヨが話をしている時に、生徒の頭が



肋木を使ったスウェーデン体操  
(『二階堂学園六十年誌』)

ちょっとでも動くと「体育家としての価値がない。何時間でも直立不動で立って居られる不屈の精神と、その実行がなければならぬ。」などと言った。スウェーデン式原型そのままの肋木<sup>ろくぼく</sup>が13欄ある。肋木を使って胸や背の運動、握りやすく出来ている肋木をつかんで懸垂を行う。トクヨは生徒を肋木にぶらさげておいて、わざとゆっくりと説明した。ドシーン、ドシーンと落ちる音がすると、「落ちた人誰です」とトクヨが言う。「〇〇です」と言ってかけあがり、再び懸垂すると「よろしい」と言う。拳上されている腕をぴしゃりと叩いて、それがゆれると、「こんにやくの化物のようです」などと言われる。長腰掛を使って平面<sup>へいめん</sup>攀登<sup>はんとう</sup>や滑り落ちを行う。「二階堂式<sup>にがいどうしき</sup>五禽<sup>ごきん</sup>運動」という、「チドリ」「つばめ」「つる」など鳥をかたどった運動を考案した。しかし、厳しい指導



鳥をかたどった運動「つばめ」  
(『二階堂学園六十年誌』)

の一方で、休むときにはあぐらをかかせた。当時女性があぐらをかくの行儀が悪いとされたが、トクヨは膝や足首の美しさを損ねないように、血行を妨げないようにという考えを持っていた。生徒一人ひとりをよく観察し、顔色の悪いものには声をかけ、汗だくの様子を見ては腰をおろさせ、女子の特別衛生について行き届いた講義をした。

飛び箱、バック、高跳び台、スプリングボード、踏切板及びマット等、体操器具については良いものを選んだ。ダンス(教育舞踏)や競技は主として隣接の代々木練兵場で行った。バスケットボール、タムブリン、テニス、バレーボール、メイポール、棍棒、球竿、リング等の遊戯道具も完備していた。

参観者が絶えなかった。ある時、関西から50名ほどの小学校校長団が参観に来た。参観者の席のあちこちで話し声がもれ始めると、トクヨはただちに授業をやめて、「出て行ってください」と言った。生徒たちも参観者もびっくりして、一瞬水をうったような静けさになった。そして授業が終わると、「先ほどは失礼致しました。先生方の話し声は生徒の精神統一を欠くものと思ったからです。」と、さりりと言ったので、参観者もほっとして帰ったという。このように体操の授業に関しては、厳しくも合理的で充実していた様子が伺える。

生徒数は変動があったが、『わがちから』大正11年4月号(『二階堂学園六十年誌』より)では44名となっている。生徒は全国の約半数の府県から集まってきた。早くも開塾年の9月にはあちこちの学校から塾生の出張教授を頼まれるようになった。

トクヨは、日本婦人の身体が悪いのはどこがどう悪いのかを突き止めるために、塾生に対して身体測定を行った。身長・体重・肺活量・握力を4月と10月に測定した。その結果、身長は約7.6cm、体重は約2kg、肺活量は0.115l、握力は左2.16、右2.56kgというようにどの測定値も平均値が増えた。また、身長100に対する胸囲・胸囲呼吸差・左胸囲・右胸囲などの各部の比例平均値も増えた。半年間の成果が数字に表れた。

服装について、当初は塾内の生活や授業には筒袖を奨励していた。体操時間には手持ちの体操服、運動靴を履くように伝えている。しかし、身体内部の呼吸機能、血液循環、消化機能を重視するトクヨは、身体のために、まもなく、体操服及び日常服をキングスフィールド・カレッジのチューニックに切り替えた。チューニックは、上衣は、体操服肌着の上にシャツ又は半袖シャツを着る。下衣は、タイツをはき、その上に胸にひだをとり、胸元がゆったりしているチューニックを着用する。共布で作ったベルトをゆるく結ぶ。肋木に逆さにぶら下がる場合、裾に近い方にベルトをしめて、チューニックの



トクヨ工女のチューニック  
(右)。左はキングスフィールド・カレッジのチューニック  
(『二階堂学園六十年誌』)

スカートの落ちるのを防いだ。キングスフィールド・カレッジのチューニックをベースに、トクヨ自身の工夫が加えられている。

寄宿舎の食事は、トクヨの母キンが奮闘した。二人の手伝いの女性を雇い、トクヨたちも含めて50人ほどの三度の食事を担当した。5升炊きのお釜が二つ、1日に3回使われ、水がよくないため、大小二つの湯わかしに絶えず湯を沸かしていた。風呂は毎日立て、肉や魚は週に2度ずつ、おやつは3、4度出した。掃除から来客の接待まですべて塾生が行った。居室を教室にし、雨が降ると雨天体操場にし、食事の時間には食堂にするなど、そのつど室内の模様替えをする。それもすべて塾生が行った。トクヨは起居を生徒とともにし、生徒たちの一挙手一投足に至るまで、言葉遣いも厳しくつけた。

固定収入が月謝と食費だけの塾の経済は厳しく、その日暮らしてあった。しかし、不思議に必要な物品の代金は、篤志家の寄付によってかろうじて支払うことができた。“蚊帳は横浜女教員会の喜捨、人体模型及び骨格の代金は大阪中山太陽堂クラブ店主の寄付、器械代残金はお茶水高女卒業甲組有志家の義拳にあった。”と、『わがちから』第2巻5号（『二階堂学園六十年誌』より）に記している。いつも支払いに窮したときに誰かが助けてくれた。“巡歴こそせね托鉢生活に等しき本塾は全く篤志家の「御ほうしゃ」に依る其日ぐらしの状態なり。”と同誌に述べている。それもトクヨの人徳によるものであったであろう。

夏季休暇も活発に活動している。開塾年の夏、塾生の希望者16名と外来希望者1名が引率者なしで富士登山を実行した。また、夏休み中、東京市主催の林間修養会が渋谷の西郷邸で開催され、女兒組300名の指揮及び自由遊びを塾生15、6名が指導した。その他、夏季遊戯講習会についてまだ声明を出していないのにも関わらず、8月初めに30余名が全国から集まってきた。トクヨは、ベビーポルカ、月見ポルカ、ドールダンスなど、10ばかりのダンスを朝から夕方まで5日ばかりで仕上げた。そこで、8月には社会奉仕として、講習部開設広告を出した。“女子体操や遊戯等を臨時に習いたいと希望する人は来てください。講習無料、謝礼等も受けない。女子研究家には1泊80銭で宿泊可”というものであった。中には男子研究家からの参加希望もあり、10月からは「男子研究家には1席20銭にて食事の便あり」という一文が加わった。まさに八面六臂の活躍ぶりである。しかし、この夏季講習は、12年度は行われなかった。雨天体操場がなく、雨が降った場合の対応ができないからである。松原に移転し、雨天体操場ができてから再開された。

卒業生の就職は順調であった。大正12年3月、第1期生49名のうち、遅れて入塾した者5名、帰省中の者1名を除いた43名は、女子師範学校や高等女学校などすべて女子の中等学校に就職した。月給70円である。月給は、トクヨが卒業生を送り出すときの条件として交渉した。ある2期生は、埼玉県秩父の小学校教

員として40円の月給で勤務した経験を持っていたが、二階堂塾卒業後、月給70円で千葉県銚子高等女学校に就職し、良い給料であったと語っている。

大正12年8月、トクヨは、大正4年～11年までの東京女子高等師範学校臨時教員養成所体操家事科の卒業生106名と、二階堂体操塾卒業生46名の教え子たちの親睦会を作り、「桜菊会」と名付けた。桜菊はトクヨの号である。師弟の親睦と同窓の和親を目的とした。

#### 参考文献

『二階堂学園六十年誌』

二階堂清寿・戸倉ハル・二階堂真寿共著『二階堂トクヨ伝』

『日本体育大学八十年史』

## 新制高等学校の補習科・専攻科の歴史的研究に関する覚書

### (33) : 『鳥取県公報』にみる鳥取県立高等学校の専攻科(7)

よしの たけひろ

吉野 剛弘(埼玉学園大学)

今号からは、『鳥取県公報』(以下、『公報』)に掲載された鳥取県立学校管理規則を検討する。今号では、1976(昭和 51)年に全部改正された規則を中心に検討する。

鳥取県立学校管理規則は、1957(昭和 32)年 9 月 10 日に教育委員会規則第 8 号として制定された。この当時に専攻科は存在していないので、専攻科に関する規定はない。しかしながら、後に専攻科が設置されても、専攻科に関する規定が加わることはなかった。

1976(昭和 51)年 4 月 1 日に教育委員会規則第 9 号で規則は全部改正された。その際に、それまで鳥取県立高等学校学則に掲載されていた高等学校の一覧表が鳥取県立学校管理規則に移管されるとともに、専攻科に関する規定が加わった(鳥取県立高等学校学則も同日に全部改正されている)。規則は非常に膨大なので、専攻科に関する規定のみを示すことにする。

#### 鳥取県立学校管理規則

鳥取県立学校管理規則(昭和三十二年九月鳥取県教育委員会規則第八号)の全部を改正する。

#### 目次

第一章 総則(第一条-第四条)

第二章 学年、学期及び休業日(第五条-第八条)

第三章 教育課程（第九条–第十一条）

第四章 教科書その他の教材の取扱い（第十二条–第十五条）

第五章 入学等（第十六条–第十九条）

第六章 寄宿舍（第二十条）

第七章 職員の組織（第二十一条–第三十九条）

第八章 職員の服務（第四十条–第四十三条）

第九章 教育財産及び物品の管理（第四十四条–第五十三条）

第十章 雑則（第五十四条）

附則

第一章 総則

（学校の課程等）

第三条 学校の課程、部科、学科、修業年限及び収容定員は、別表のとおりとする。

第二章 学年、学期及び休業日

（学期）

第六条 学期は、次のとおりとする。

- 一 第一学期 四月一昨から七月三十一日まで
- 二 第二学期 八月一日から十二月三十一日まで
- 三 第三学期 一月一日から三月三十一日まで

2 高等学校の専攻科の学期は、前項の規定にかかわらず、次のとおりとする。

- 一 第一学期 四月一日から八月三十一日まで
- 二 第二学期 九月一日から翌年三月三十一日まで

別表の形式は以下の通りである。

高等学校名	課程名	学科名	修業年限	収容定員	所在地
-------	-----	-----	------	------	-----

専攻科は、課程名と学科名を一括して「専攻科」とだけ記載された。

この全部改正以降には、定員減と専攻科の廃止しか起こっていないので、その点以外の規程の改正はないものと推察される。

(付記) 本研究は科学研究費補助金(20K02435)の助成を受けたものである。

## 旧制灘中学の教育目標と生徒の活動(5)

とみおか まさる  
富岡 勝(近畿大学)

### はじめに

第104号より、旧制灘中学校の教育目標や生徒の活動についての史料を紹介している。105号と106号では、灘中学校の顧問をつとめた嘉納治五郎の教育方針を示す史料を取り上げ、第107号からは、初代校長眞田範衛(さなだ・のりえ。1889年～1946年)の教育方針に関わる史料を紹介している。

今回は、眞田範衛の著書と思われる中等学校受験準備書刊行会『誤り易い算術問題とむづかしい算術問題』(南光社、1920年1月)の「はしがき」を、眞田範衛先生遺稿集刊行委員会編『初代校長眞田範衛の生涯と遺稿』(灘中学校・灘高等学校、1997年)に翻刻された内容にもとづいて紹介する。

### 『誤り易い算術問題とむづかしい算術問題』

第107号で述べたように、眞田範衛は、東京高等師範学校で2度学んでいる。すなわち、1回目は1912年4月から1916年3月に本科数物化学部で、2回目は1918年6月から1920年3月には専攻科修身教育部で学んでいる。つまり、『誤り易い算術問題とむづかしい算術問題』は高等師範学校専攻科の卒業の卒業間際に完成したことになる。

なお、この本は中等学校受験準備書刊行会編となっているが、『初代校長眞田範衛の生涯と遺稿』のなかで、『誤り易い算術問題とむづかしい算術問題』の出版部数について報告する出版社から眞田範衛宛の書簡が掲載され、眞田が著者であることが明記されているので、眞田範衛の著書であると考えて間違いないと思われる。

以下紹介する「はしがき」のなかで、眞田は「入学試験に及第するか落第するかは、これらの誤り易い問題やむづかしい問題が出来るか出来ないかによつて

きまるのである」と述べている。これは、眞田が1916年4月から静岡県浜松師範学校教諭として勤務していた経験にもとづいた記述であると思われる。

また、「準備書で一とおり準備をすまさない人でも尋常科の教科書を十分に勉強してある人は直ぐこの本で準備しても大丈夫入学試験がうけられると思ふ」と述べている点は、眞田が中学受験参考書で受験勉強を重ねてきた読者だけでなく、尋常小学校で学んだだけでの読者も励ますような書き方をしている点は、注目される。中学受験のために長時間の詰め込み教育が重要なのではなく、解き方を理解しながら効果的に学んで受験することが望ましいと考えているようにも推測される。

以下、「はしがき」を引用する。

はしがき

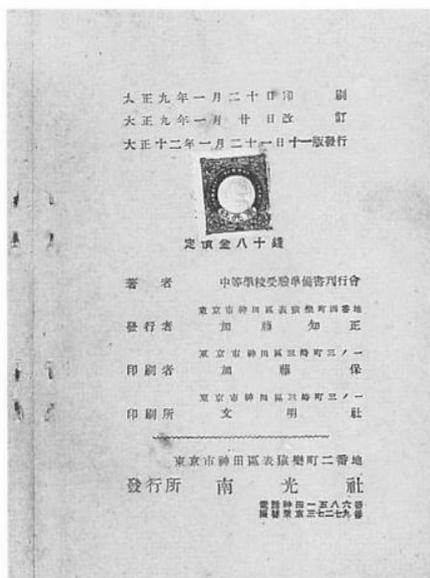
○どこの入学試験の問題を見ても二、三題位は誰にも出来る問題であるが、必ず一、二題は誤り易い問題かむつかしい問題が交つてゐる。そこで入学試験に及第するか落第するかは、これらの誤り易い問題やむつかしい問題が出来るか出来ないかによつてきまるのである。

○この本はこれまでに方々の学校の入学試験に出た問題や出そうだと思はれる問題の中から特に誤り易い問題とむつかしい問題とをえらんで、誤り易い問題については丁寧にその誤り易い点を注意して解式を示し、むつかしい問題にはその解方を示して置いた。

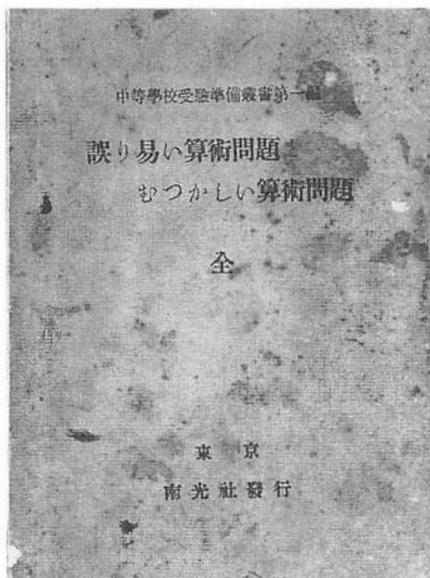
○それ故或る準備書で一とほり準備のすんだ人は是非ともこの本で準備の仕上げをしなければならない。又準備書で一とおり準備をすまさない人でも尋常科の教科書を十分に勉強してある人は直ぐこの本で準備しても大丈夫入学試験がうけられると思ふ。

○誤り易い問題の練習問題は一度は計算して答を出して見る事が必要である。又むつかしい問題は其の解き方の意味をよく了解しなければならない。かうして初めての計算で誤つたのや出来なかつたのには特に印をつけて置

いて、二度目からはその印のついた問題のみを練習してゆけば割合に早く皆出来るやうになるものである。



奥付



表紙

『誤り易い算術問題とむつかしい算術問題』  
(『初代校長眞田範衛の生涯と遺稿』(1997年)より)

(以下、次号)

## 体験的文献紹介(58)

### — 中学校教則大綱とその意義 —

かんべ やすみつ  
神辺 靖光(ニューズレター同人)

前回、「明治14年以前の公立中学校教則」の表題で明治7年から10年までと11年から13年までの公立中学校の教則を論述した。10年までのものは幕末から明治初年に興った幕府の学校、藩校、郷校や学者たちが開いた漢学塾、国学塾、洋学塾の<sup>しだい</sup>「読書次第」を教則化したものであったが、11年以後のものは進学・非進学のコース制をとったり、修学年限に長短の差をつけたり工夫されている。そして旧来の漢学・国学・洋学という大分類の中から国語、漢文、英語、日本史、地理、物理、化学等を抽出して中学校の学科としたのである。画期的なことであった。ここにおいて文部省は各中学校がつくる教則の規準を示す中学校教則大綱をつくらねばならなくなったのである。

明治14年7月29日・文部省達第28号中学校教則大綱(内閣官報局編・明治23年刊『法令全書』復刻版・昭和51年3月・原書房)を見よう。

第1条 中学校ハ高等ノ普通学科ヲ授クル所ニシテ中人以上ノ兼務ニ就クカ為メ又ハ高等ノ学校ニ入ルカ為メニ必須ノ学科ヲ授クルモノトス

第2条 中学科ヲ分テ初等高等ノ二等トス

<sup>おや</sup>親法規の改正教育令を越えて第1条では① 中人以上の業務につく、② より高等な学校に進学する。という二つの目的を掲げ、第2条では初等、高等、2等の課程を示す。<sup>ちな</sup>因みに「小学校教則綱領」でも初等・中等・高等の3等の課程を示しているから明治14年における教育課程改訂は文部省の並々ならぬ改革決意を示したものと思われる。

第1条にある「中人以上ノ業務ニ就ク」は斬新なコトバである。明治維新初期、太政官政府の官僚になったのは薩長土肥の東征軍の士族たちであったが、次

第に各藩の有能士族を加えた。士族は和漢の文字に通じており、中には西洋文字の読み書きができる者もいた。文字を通して命令を伝達する新政府の官僚は士族でなければ勤まらなかった。明治10年代になると府県が地方行政の主役になり在地の士族たちを登庸したが、町村段階にまで行政がゆき渡ると城下街まちに住む士族では勤まらず、庄屋名主しょうやなぬしを兼ねる郷士ごうまで官僚の末端に加えねばならなくなった。これらを引つくるめて中人と言ったのである。

第3条 初等中学科ハ修身 和漢文 英語 算術 代数 幾何 地理 歴史 生物 動物 植物 物理 化学 経済 記簿 習字 図画及唱歌 体操トス 但唱歌ハ教授法等ノ整フヲ待テ之ヲ設クヘシ

第4条 高等中学科ハ初等中学科ノ修身 和漢文 英語 記簿 図画及唱歌 体操ノ続ニ三角法 金石 本邦法令ヲ加ヘ又更ニ物理 化学を授クルモノトス

初等中学科と高等中学科の学科を並べたて中学校教則大綱の骨格を示そうとする。和漢文以下経済までは従来の和漢学洋学学習の分野を編成し直した学科であるが、冒頭の修身と記簿、図画、唱歌、体操は新しい学科である。漢籍に「修身」の語があり文字通り「わが身の言語行動おさを修める」ことであるが、新規の修身はその実例を和洋各地の寓話から取り集め再構成するものであった。記簿、図画は技術教育。唱歌・体操は日本の音曲おんきょく、武術稽古ではなく全く異質の西洋式を摂取しようとするものであった。

第5条 中学校ニ於テハ土地ノ情況ニ因リ、高等中学科ノ外、若クハ高等中学科ヲ置カス普通文科学普通理科ヲ置キ又農業工業商業等ノ専修科ヲ置クコトヲ得

第6条 普通文科ハ高等中学科中ノ三角法、金石、物理、化学、図画等ノ某科ヲ除キ或ハ其程度ヲ減シ修身、和漢文、英語、本邦法令等某科ノ程度ヲ増シ又歴史、経済、論理、心理等ノ某科ヲ加フルモノトス

第7条 普通理科ハ高等中学科中ノ和漢文、英語、本邦法令等ノ某科ヲ除キ或ハ其程度ヲ減シ金石、物理、化学、図画等某科ノ程度ヲ増シ又代数幾何、測量、地質、重学、天文等ノ某科ヲ加フルモノトス

第8条 初等中学科卒業ノ者ハ高等中学科ハ勿論、普通文科、普通理科其ノ他  
師範学科、諸専門ノ学科等ヲ修ムルヲ得ヘシ

第9条 高等中学科卒業ノ者ハ大学科、高等専門学科等ヲ修ムルヲ得ヘシ。但  
大学科ヲ修メントスル者ハ相当ノ内尚必須ノ外国語ヲ修メンコトヲ要ス

以上第5条から第9条までは高等中学科は事情が許さなければつくらなくてよ  
いと述べているのであり、替わりに理科だけの、或は文科だけの高等中学科をつ  
くってもよいとしているのである。この考え方が後年の帝国大学への進学を独占  
した官立高等学校体制の<sup>ほうが</sup>萌芽であったと言えよう。

第10条から13条までは中学校教則大綱の本旨というべき箇条である。

第10条 初等中学科ヲ修メントスル生徒ハ小学中等科卒業以上ノ学カアル者  
タルヘシ

第11条 中学校ノ修業年限ハ初等科ヲ四箇年トシ高等科ヲ二箇年トシ通シテ  
六箇年トス

但此修業年限ヲ伸縮スルコトヲ得ヘシト雖モ一箇年ヲ過グヘカラス

第12条 中学校ニ於テハ一箇年三十二週以上授業スルモノトス

第13条 中学校授業ノ時間ハ初等科ハ一週二十八時、高等科ハ一週二十六  
時ヲ以テ度トス但此時間ヲ伸縮スルコトヲ得ヘシト雖モ一週二十三時ヲ下ル  
ベカラズ三十時ヲ過クベカラズ

このような箇条を並べたてたあと「右掲クル所ノ中学科毎週授業時間ノ一例ヲ  
示スコト左表ノ如シ」として[表1]を掲載しているのである。

比較のため、[表2]として尋常中学校ノ学科及其程度(明治19年)第4条を  
示す。

[表1]

通 計	体 操	図 画	習 字	本 邦 法 令	記 簿	経 済	化 学	物 理	金 石	植 物	動 物	生 物	歴 史	地 理	三 角 法	幾 何	代 数	算 術	英 語	和 漢 文	修 身	学 科	
																						前 期	後 期
二 八		二	二										二	二				五	六	七	二	前 期	第 一 年
二 八		二	二										二	二				五	六	七	二	後 期	
二 八		二	二								二		二	二			二	二	六	六	二	前 期	第 二 年
二 八		二	二							二		二	二		二	二		二	六	六	二	後 期	
二 八		二						二		二			二	二			二	二	六	六	二	前 期	第 三 年
二 八		二						二	三				二			三	二		六	六	二	後 期	
二 八		二				二	二						二	二			二	二	六	六	二	前 期	第 四 年
二 八		二			二	二	二						二	二			二		六	六	二	後 期	
二 六		二			二			二	二						二				七	七	二	前 期	第 一 年
二 六		二						二	二					二					七	七	二	後 期	
二 六		三		二				二											七	七	三	前 期	第 二 年
二 六		三						三											七	七	三	後 期	
三 二 八		二 六	八	二	四	四	四	一 三	四	五	四	四	一 六	一 〇	四	一	一	一	七	七	二	時 間 比 較	各 科 授 業

〔表  
2〕

ス	第二外国語ト農業トヲ並ヘ置クトキハ其一ヲ生徒ニ課スルモノト	計	体操	唱歌	図画	習字	化学	物理	博物	数学	歴史	地理	若クハ農業	第二外国語	第一外国語	国語及漢文	倫理	第四條		
		二八	三	二	二	二				一	四	一	一			六	五	一	第一級	第五級
		二八	三	二	二	一	}				四	一	二			六	五	一	第二級	第四級
		二八	三		二					二	四	二	二			七	五	一	第三級	第三級
		二八	五		二		二				四	一	一	四	五	三	一		第四級	第二級
		二八	五		一				三	三	三	二		三	五	二	一		第五級	第一級

上記・教則大綱12条の「年間授業32週以上」の語句に「おや、あれ？」と驚いた方もいただろう。明治新政府はすでに明治5年旧暦11月9日、太陰暦を廃し太陰暦を採用する旨を宣言し、旧暦12月3日を明治6年1月1日にしたからである。しかし実際に太陽暦で生活しはじめたのは官庁街の一部であって日本全国太陽暦になったわけではなかったのである。

そもそも太陽暦を言い出したのは西洋の御雇い教師や技師たちであった。新政

府は文明開化のスローガンの下、鉄道、電信、警察、軍隊、学校、すべてを西洋化しようと思って多くの西洋人教師や技師を雇った。彼らは当然ながら日曜日は休暇と心得、出勤しない。御雇い教師や技師たちに頭のあがらない新政府の面々は忽ち折れて日曜休日、土曜半どんの太陽暦採用となったのである。けれども長年、太陰暦に親しんできた日本国民が一朝にして一週間7日サイクルの太陽暦で生活できるわけではない。大坂の町人たちが言う五十の日（一月を5日、10日、15日、20日、25日、30日で一巡させる）勘定のように一月を5日単位で回転させるやり方が一般的であった。寺子屋や漢学塾の授業もそれで5の日、10の日のように、2、7の日、3、8の日と言う具合に授業をしたり、決められた漢籍を素読したり、講釈したりしたのである。明治維新後、五十、二七など悠長なことはやっていられなくなって連日学習になってゆくが、休日を毎月、日曜日にとるなどという破天荒なことはできることではなかった。士族などと威張ってみても明治初年の人口統計でみればやっと国民の5%、さらに5%強の商人がいて国民の90%近くが農民（漁民等を含む）である。季節気候によって作業労働が異なる農民は太陽暦の週制で日曜休日など、やっていけるものではない。日本の農民にとって春から夏にかけては米をはじめ作物の成長期で休む暇など全くないのである。しかし秋に収穫がはじまり、年貢を収めると一気に娯楽がふえてくる。囲炉裏を囲む一家団欒のおしゃべり、買い求めた子どもの晴れ着、餅搗き、ぞう煮、なべ料理、節分豆撒きを終わって三月三日の雛祭りを喜ぶ。冬の団欒も終末となって春からの奮励努力に立ち向かわねばならない。東北の北海道から西南の沖縄までさつま芋のような形で伸びる日本列島だから四季の季節が上記のようにぴったり合わないかも知れないが、大方の四季の生活仕方は述べた通りだろう。当時、日本人の九割を占める農民は、はじめ太陽暦週制の強制に反抗し抗議したが、やがて持ち前の妥協性と新規を喜ぶ世代交替の末、明治の終り頃には太陽暦による三学期制、春4月入学の新学期、8月夏休み、9月2学期始まり12月終了、新年1月3学期始まり3月終了卒業式という学校暦をつくり上げたのである。その発端は実にこの明治14年の「中学校教則大綱」（7月29日）、「小

学校教則綱領」(5月4日)の公布にあったのである。

要するに太陽暦採用と日曜休日の週制は明治新政府によって早くも明治5年末に宣言されていたのである。しかし御雇い外国人が住む東京の官庁街以外では通用していなかったのである。しかるに明治14年7月末の「中学校教則大綱」(同年5月の「小学校教則綱領」も)において日曜休日の週制が強く打ち出されて府県町村の地方行政が覚醒し、さらに19年の中学校令・小学校令に属する「学科及其程度」(教育課程)が週制に乗って構成されたことによって太陽暦が日本全土の国民に染み渡るきっかけになった。さらにこれには19年からはじまった3学期制の学校暦(4月入学、3月卒業)に土地の習慣・行事を巧みに組み合わせる工夫努力があったが、それらは別稿にゆずる。

#### 参考文献

文部省の法令法規は『学制八十年史』『学制百年史資料編』を用いていたが「学科表」等に不備があったので『法令全書』復刻版を用いた。

## 近況報告

ながもと ゆうこ

長本 裕子(ニューズレター同人)

1月22日(月)、津田塾大学小平キャンパスで行われた「津田梅子と新渡戸稲造——二人の出会いと協力、別れまで」という講演会に行ってきました。講師は、盛岡市にある一般財団法人新渡戸基金理事長藤井茂氏でした。創立120周年記念事業の一環として開かれたものですが、梅子が今年の7月から新五千円札の肖像に登場するとあって約200名が参加し、報道関係者も入り、盛況でした。新渡戸も1984~2004年まで、やはり五千円札の肖像になりました。新渡戸は1862(文久2)年生まれ、梅子は1864(元治元)年生まれで、新渡戸が二つ年上です。

1900(明治33)年9月、梅子が、津田塾大学の前身、女子英学塾を麴町区一番町(現千代田区三番町)で開校する時、新渡戸は友人として協力者の一人となります。塾の課外授業で、『武士道』について3回連続講義をしたりして、自ら「塾の伯父」と称していました。梅子は1929(昭和4)年に亡くなりますが、新渡戸は1933(昭和8)年に亡くなるまで理事として協力しました。

小平キャンパスは、正面に黄土色のレンガ風の壁が美しい本館が迎えてくれます。講演会終了後、私は、グラウンドの奥にある梅子のお墓にお詣りしました。



『ニューズレター』第73~77号に女子英学塾について投稿し、2021年に神辺靖光先生との共著「『花ひらく女学校』明治女子教育史散策 明治後期編」に掲載しましたが、まだキャンパスを訪れていませんでした。梅子のお墓にはきれいな花が捧

げられていましたが、参道の左側に梅林があり、ちょうど紅梅と白梅が咲いて芳香を添えていました。学生たちがテニスボールを打つ音と、小鳥のさえずりだけが聞こえる静かな墓前で、遅ればせながら、挨拶と本の報告をしました。

4月13日(土)、東京ウイメンズプラザホールで「新札記念津田梅子シンポジウム」が開かれます。第一部は、高橋裕子学長、梅子の父津田仙の曾孫津田道夫氏ら4名によるパネルディスカッション、第二部は「ピアノと朗読の集い」です。しばらくは梅子ブームが続きそうです。

(長本さんから、近況について詳細な文章をいただきましたので、レイアウト担当の山本剛さんの発案により、上記のような「近況報告」の独立記事になりました。みなさんも、「近況報告」のご執筆、いかがですか? 富岡)

『月刊ニューズレター 現代の大学問題を視野に入れた教育史研究を求めて』  
刊行要項(2015年6月15日現在)

1. (目的) 広い意味で「現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究」を各執筆者が互いに交流し、研究を進展させていくことを目的にこのニューズレターを発行します。
2. (記事のテーマ) 記事は、広い意味で現代の大学問題へのアプローチを視野に入れた研究であれば、高等教育史だけでなく中等教育史や初等教育史なども含めた幅広いテーマを募集します。
3. (刊行頻度・期間) 研究進展のペースメーカーとするため毎月刊行し、最低限3年間は継続します。
4. (編集委員会・編集世話人) 発行主体は編集委員会とし、編集責任者として編集世話人を設け、当面は富岡勝と谷本宗生が担当します。編集委員は、執筆者の中から数名程度募集します。
5. (執筆者) 執筆者は、最低限1年間参加し、原則として毎月執筆してください。ご希望の方は、編集世話人までご連絡ください。執筆者は、刊行経費として毎年600円を負担してください。
6. (記事の責任) 記事の内容については、執筆者で責任をもって執筆してください。参考文献・引用文献の出典を明らかにするなどの研究上の基本ルールはもちろん守ってください。また、ごくまれに、編集世話人の判断によって記事の掲載を見合わせる場合があります。
7. (記事の種類・分量) 記事の種類は、論考、研究上のアイデア、史資料の紹介、先行研究の検討など研究に関するものでしたら何でも結構です。記事1本分の分量は、A5サイズ2枚～4枚ぐらいを目安とします。
8. 毎月の刊行をスムーズに行うため、レイアウトなどは簡素なものにとどめます。世話人によるニューズレターの印刷は、国会図書館献本用などごく少数にとどめます。執筆者にはニューズレターのPDFファイルをメールでお送りしますので、各執筆者で必要部数をプリンターで印刷するなどして、まわりの方に献本してください。
9. ニューズレターの内容は、下記のホームページで公開します。  
<http://home.hiroshima-u.ac.jp/komiyama/gen-dai-kyou-ken/>
10. ニューズレターを中心とした研究交流をしていきますが、年に1回程度は、必要に応じて執筆者の交流会を開催します。
11. 以上の内容を変更したときは、この要項を改訂していきます。

以上

## 短評・文献紹介

2023年12月12日の東京新聞の記事に、「会社の忘年会 県民性で差？」(こちら特報部)が挙がっていて、東京商工リサーチが実施した全国4747企業アンケートによれば、都道府県別の忘年会・新年会の実施予定にかなり地域差がある・という内容でした。それによれば、全国平均54.5%に対し、最多は沖縄の78.7%で、秋田73.2%、大分70.3%と次いで多く、東京57.0%と平均を上回っています。いっぽう、最少は埼玉41.1%で、千葉41.5%、岐阜41.7%と低調なよし。関東圏でみても、茨城43.6%、栃木47.0%、群馬47.7%、神奈川50.6%と、概ね平均以下であるという。不思議ですよ。

なお同上記事では、飲み会を少し敬遠する若者らの心理傾向について、公認心理師である川島達史さんによれば、「若い人らが飲み会自体嫌いだというわけではない。少人数の親しい人で個別にはやっている」のではないかと。むしろ、若い人のなかには「仕事上で人と関わらなくなった、交流がない」として淋しいと嘆く声も挙がっているようだ。さらに川島氏も、「人はリアルな交流を求めるもの。感情を受け止めてくれる、共感する時間がないと心が休まらない。心の健康のために集まったの雑談は大切だ」と主張しており、昼間のランチ会でもよいので、相応に雑談できる機会をやはり設けるべきなのでしょう。(谷本)

この欄を借りて父、貞男(1931年1月生まれ)がのこした文章を教育史資料として紹介している。前号に続き、貞男が書いた「生い立ちノート」をとりあげ、本号では、小学生時代についての記述の一部を紹介したい。本土空襲が始まった1944年に、おそらく当時国民小学校4年生であった貞男少年が、縁故疎開で母の実家のあった岩手県胆沢郡水沢町に疎開したらしい。戦後の記述で「水沢小学校」と書いてあったので、おそらく当時通ったのは水沢国民学校だったと思われる。校庭での朝礼が毎日行われ、遅れないで整列させることが級長にもとめられこと、また級長は担任に代わってほかの「少国民」に懲罰を与えることがおそらく許されていたのだろう、ということが伺われる。(以下、引用)

疎開 小学4年～6年

岩手県奥州市水沢 柳街(旧胆沢郡水沢町)母・ツマの実家である。

○小学3or4年、戦局不利、本土空襲に及んで疎開が号令された。事情は知らぬが、次男の私が一人先発隊として母の里に預けられた。両親／兄弟は数ヶ月後に合流、一軒家を借りて狭い乍らも楽しい我が家に戻った。母の両親は健在で、私は初めてお目にかかった祖父母だが、優しく接してくれた。家族は多く、計7～8人、いやもっと居たかも——。私の仕事は馬の世話係り。カイバ桶にワラ／牧草etc.を入れて食べさせる。ブラシがけ／手綱をひいて散歩etc.結構楽しかった。

○家でも／学校でもイジメられたことは全くない。不思議な話だが本当にその経験／体験の記憶はない。

○級長／ビンタ 毎朝、全校児童が校庭にて朝礼するのが日課だった。わがクラスはいつも集合におくれ勝ちで、そのことが級長である私の悩みだった。ある朝、思い込んで集合直前にクラスで全員を整列させ、ビンタを張った。そのことが今にまでトラウマになっているのだ。

(富岡)

---

## 会員消息

---

このところ、世間では組織としてのコンプライアンスやガバナンスの面などから、日本の大学や学校法人としての大学運営方針などについて、賛否・是非の問題も含み、とても注視されている状況が生じています。私も公務上から、自身が所属する学校法人の理事会・評議委員会などの歴史的な公的文書書類の内容を確認する機会があり、1960年代前半にはすでに大学運営方針については、毎年定期的に学校法人としての理事会などで審議承認されていることがよく分かりました。私立学校の運営においては、まず学校法人としての健全な財政運営が基本的にもとめられ、その前提において学園・大学振興も積極的な計画性をもって進めていかなければならない…という決意が、当時の大学運営方針の関係書類の根底にはあります。当然ながら、当時の教学の教授会側からも、理事会側が策定した大学運営方針について、その意図や計画性などについて、丁寧な説明をもとめており、これに対し、当時の理事会側も真摯に説明責任を果たしていくと明言し対応しています。教学と経営との関係性は、たしかに相応な緊張関係もあるのですが、学校法人として、やはり必要に応じて有益な意見交換をはかりながら、健全な信義の関係性を構築していく努力や姿勢が不可欠なのかもしれませんね。(谷本)

非常に久々の誌面登場となってしまいました。失礼いたしました。コラムでも書きましたが、現在、上越教育大学学校教員養成・研修高度化センター助教として勤務しています。今回の冬は「暖冬」ということでしたが、同僚たちに「でも降るときは降るよ」と言われた通り、普通に12月半ばあたりから雪が降り始め、あつという間に歩けないレベルに積り、「道が見えてきたな」となるとまた積もります。なお自宅周辺は上越市内の平地の中では特に雪が多いため、逆に優先的に除雪されるので、タクシー運転手の方から「優遇されているね」と言われました(実際、自宅周辺でタクシーの揺れがおさまりました)。大変な環境ではありますが、楽しく過ごしています(長谷川)。

毎年、本務校の後期が終了した頃から、看護学校での「教育学」の集中講義が始まります。看護師養成校で、どのような内容の「教育学」を講義するのか、毎年、悩むところです。指定された「教育学」の教科書は、教育学研究者による執筆なので、学校教育の課題が中心です。看護師になる学生に、学校教育の歴史ばかり説明されてもどうかと思います。（山本剛）

勤務先では授業資料の配布や課題配布・回収などにGoogleClassroomという、グーグル社のサービスを、対面授業になってからも使っています。これは、Googleドライブ（教材や提出された課題などをGoogleのサーバーに保存）、Googleフォーム（アンケート形式で小さな課題を出すことができる）、Googleドキュメント（オンラインで使えるワープロソフト）などを組み合わせたサービスで、これを使ってレポートや小課題を集めると提出日などがきちんと記録されているので、必要があれば一部の授業をオンライン授業に切り替えるのも簡単ですし、課題についての学生とのやりとりもスムーズに行うことができます。また、成績処理の時期には大変助かります。同時に受講生にとっても、パソコンかタブレットを持ち歩けば、プリントの詰まったファイルを持ち歩かずに済み、提出した課題を見直したり、教員からの評価を確認する上でも有効なので、学習を助ける存在だろうと思います。

しかし、ジレンマもあります。グーグルやマイクロソフトなど、オンライン教育の基盤を提供している会社のサーバーに学生・生徒の学習データが毎年、着々と蓄積されているからです。もちろん、IDやパスワードで提出課題は漏洩しないようになっていますが、こうした大会社がその気になれば学生生徒の膨大なデータをビッグデータとして企業活動に役立てることが可能だろうと思います。あるいはなんらかの理由で裁判所が認めた場合には、その人物の学生・生徒時代の課題の成績や書いた文章などが閲覧できてしまう、ということにもなりかねません。どうしたらいいのだろうか、思いながらここ数年間を過ごしています。

（富岡）

本ニュースレターのPDFファイルをダウンロードして、Adobe Reader 等のソフトの「小冊子印刷」機能を利用して「A4 サイズ両面刷り」に設定して印刷すれば、A5 サイズの小冊子ができます。